

8. 中年期男性の冠動脈バイパス術後の体験

○榎 一美 (姫路大学看護学部)

藤野 文代 (横浜創英大学看護学部)

I. はじめに

近年、狭心症や心筋梗塞など虚血性心疾患の罹患率は、食生活や生活環境の欧米化に伴い増加傾向にあり、心疾患は日本人の死亡原因の第2位となっている。冠動脈主管部病変など動脈硬化の進行した患者が外科的治療法の一つである冠動脈バイパス術を受ける傾向にある。冠動脈バイパス術を受ける患者は、心臓という生命の維持に直接関わる手術により、不確かさや死の恐怖、身体的苦痛や精神的動揺、社会的役割上の不安などを体験する。また、虚血性心疾患における男性の罹患率・死亡率は女性より高く、罹患率平均年齢は50代後半という中年期に相当し、重要な社会的役割を担う時期でもある。したがって、中年期の男性患者が冠動脈バイパス術を通して体験したことから意味を見出し、自己の新しい価値観や再構築が出来るように支援することが必要であると考え、本研究は、冠動脈バイパス術後どのような体験をしているのかを明らかにすることを目的とし、今後の看護支援の示唆とする。

II. 研究方法

1. 研究デザイン：質的帰納的研究
2. 研究対象者：冠動脈バイパス術を受け、現在外来通院をし、40～65歳の男性患者4名。
3. 研究期間：平成28年1月～平成28年9月
4. データ収集方法：研究の主旨に同意が得られた患者5名にインタビューガイドを用いて半構成的に面接を行った。面接はプライバシーの保てる場所で30～60分程度とし1回行った。面接内容は許可を得てICレコーダーに録音した。
5. データ分析方法：録音した内容から逐語録を作成し、冠動脈バイパス術の体験に関する記述をデータとして抽出しコード化、更にカテゴリー化した。すべての分析過程において質的研究の経験をもつ指導教員にスーパーバイズを受け、分析内容の真実性・妥当性の確保に努めた。
6. 倫理的配慮：関西福祉大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

インタビューの結果、中年期男性の冠動脈バイパス術後の体験として、身体的側面では、手術による胸骨切開や心負荷を考慮し、重い物を持たないようにする等、日常生活や仕事を工夫していた。正中創の痛みは術後約3ヶ月で軽減、グラフト採取部位の痛みは2～3ヶ月後に軽減していた。精神的側面では、冠動脈バイパス術を受けたことで、今までの自分自身を反省し、今後の人生や生活について転換期となっていた。仕事上において、今までの自分の役割を果たせないことへの葛藤を感じていた。また、再発についての不安、仕事を継続していくことへの不安、家族の生活への不安を抱えていた。家族や周囲の存在が生きがいや支えとなっていた。社会的側面では、術後は経過をみながら、体力の回復、心負荷の軽減をはかり、約1～2ヶ月の自宅療養を送っていた。日常生活（自己管理）において家族の協力、仕事面では有給休暇や特別休暇の取得、配置換えや上司や同僚の協力を得るなどの対処をしていた。

現在、データ収集・分析中であるため、考察、結論は当日発表する。